

鹿児島県立隼人工業高等学校

新時代を切り拓く地域融合型人材育成プロジェクト

～ コンソーシアムパーク隼人 ～

1 学校の概要

本校は、昭和23年に隼人町立定時制課程鹿児島県隼人高等学校として発足して以来、社会情勢や産業構造の変化に対応しながら幾多の変遷を経て、昭和37年に鹿児島県立隼人工業高等学校となり、昭和63年から現在のインテリア科・電子機械科・情報技術科の3学科体制となり、今日に至っている。

令和7年4月7日現在の生徒数は、インテリア科109名、電子機械科199名、情報技術科103名、計411名であり、工業科単科としては中規模校に位置付けられる。通学区域は、霧島市、始良市、湧水町を中心に、伊佐市、鹿児島市、垂水市、曾於市など広範囲に及んでいる。

本校は、校訓「至誠・自律・友愛」の精神を尊重し、「ものづくり」「キャリアづくり」「人づくり」を教育の基本方針として掲げ、各学科の特色を生かした専門教育を推進している。社会に貢献できる工業技術の修得を図るとともに、体験的な学習を重視し、確かな学力の定着や資格取得をとおして、自己実現を図る能力の育成に努めている。また、健やかで礼儀正しく、創造性と主体性を備えた意欲的な生徒の育成を教育目標としており、これまでに1万1千人を超える卒業生を県内外に輩出してきた。

さらに、本校が所在する霧島市は、「国分隼人テクノポリス」構想を起点として発展した高度技術産業集積地域に指定されており、IC 関連製造企業をはじめとする多くのハイテク企業が立地している。本校は、こうした地域特性を生かした産学官連携を推進しており、その成果として、他の工業高校よりも、県内就職割合が比較的高い水準で推移している点も本校の大きな特色である。



図1 校章

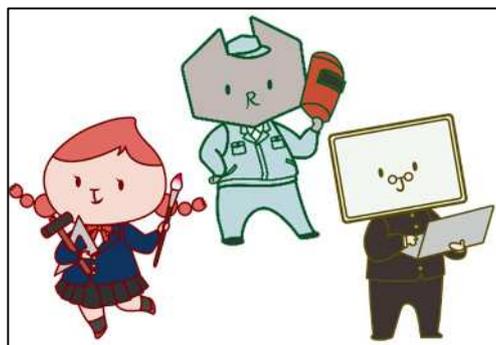


図2 マスコットキャラクター

2 事業の概要

(1) 事業のねらいや目標

近年、デジタル技術の進展やグローバル化のさらなる加速により、社会はかつてないスピードで変化している。このような中、地域を支える専門的職業人を育成するためには、これまでのものづくりの知識・技術を産業界で直接学ぶことに加え、起業や流通・販売といった知識を取り入れることが必要不可欠である。

霧島市には、様々な教育機関や企業、文化的な資源が集積しており、この特性を生かして、行政・教育機関・産業界等とコンソーシアムを構築することで、地域一体となった専門的職業人の育成や魅力ある高校づくりが可能となる。その取組を通じて、地域や工業教育への誇りや愛着を醸成し、郷土やものづくりの魅力を内外に発信できる人材の育成を目指す。

本事業では、デジタル技術の習得やアントレプレナーシップ教育を推進することで、新たな価値を創造し、社会に貢献できる次世代の人材育成を図る。

(2) 育成する人材像

ア 予測困難な時代においても、社会の急激な変化に耐えることができ、目の前の状況から解決しなければならない課題を見つけ、自分で考え、解決策を見出す資質と能力を備えている人材

イ 地域や工業教育に誇りや愛着を持ち、郷土やものづくりの魅力、自らの知識や技術を内外に発信でき、地域の持続的な成長を支えることができる人材

(3) 期待される効果

ア 地域の持続的な成長を支える職業人の育成

イ 社会に開かれた魅力ある高等学校づくりの促進

ウ 生徒一人一人の企画力・実践力が向上し、個別最適な学びと協働的な学びの実現

(4) イメージ図



3 事業の経過

日	内 容	参 加 者
5 月		
1 日	出前授業：建築設計競技（県建築士会）	インテリア科 2 学年
13 日	協働制作：初午祭ポスター制作ヒアリング （霧島市役所，初午祭実行委員会）	インテリア科 3 学年
	協働制作：霧島市文化協会看板制作ヒアリング （霧島市文化協会溝辺支部，溝辺総合支所）	インテリア科 3 学年
16 日	中学校への出前授業（霧島中学校） 文鎮製作・プログラミング基礎	電子機械科 情報技術科
20 日	出前授業：アントレプレナーシップ教育 （株式会社オーガランド）	全学科 3 学年
下旬	近隣中学校への学校紹介	担当教員
6 月		
10 日	第 1 回コンソーシアム代表者会議	担当教員
12 日	霧島で働く魅力発見！企業見学会 （ヒロセ株式会社，東フロコーポレーション株式会社，マイクロカット株式会社，キリシマ精工株式会社）	3 学年就職希望者
7 月		
1 日	協働制作：初午祭ポスター制作中間報告 （霧島市役所，初午祭実行委員会）	インテリア科 3 学年
3 日	協働製作：イルミネーションパネル製作 （SDGs products 株式会社）	全学科 3 学年
7 日	出前授業：BIM (Building Information Modeling) （第一工科大学）	インテリア科 2 学年
15 日	出前授業：アントレプレナーシップ教育 （ソフトマックス株式会社）	情報技術科 2 学年
22 日	協働制作：黒酢ラベルデザイン打合せ （有限会社重久盛一酢醸造場）	インテリア科 3 学年
8 月		
21 日	スキルアップセミナー：未来を拓く投資戦略	希望者
26 日	中学生一日体験入学	全学科
9 月		
8 日	体験学習：BIM (Building Information Modeling) （第一工科大学）	インテリア科 2 学年
24 日	出前授業（マイクロカット株式会社）	電子機械科 2 学年

10月		
15日	企業内実習（マイクロカット株式会社）	電子機械科2学年
28日	講演会：生成AIの利活用と情報モラル （第一工科大学）	全校生
11月		
19日 20日	企業内実習（マイクロカット株式会社）	電子機械科2学年
20日	企業見学（ソニーセミコンダクタマニュファク チャリング株式会社，株式会社アルバック）	情報技術科2学年
12月		
2日 5日	出前授業：生成AI利活用 （第一工科大学）	全学科2学年
12日	協働製作：LUMI Satsuma2025 出展 （SDGs products 株式会社）	全学科3学年
13日	職員企業研修：TIG溶接 （株式会社藤田ワークス）	電子機械科職員
16日	連携学習：アントレプレナーシップ教育 （国分中央高等学校）	全学科2・3学年
17日	協働制作：黒酢ラベル・化粧箱完成 （有限会社重久盛一酢醸造場）	インテリア科3学年
18日	企業内実習（マイクロカット株式会社）	電子機械科2学年
18日	美術・工芸見学 （黎明館，株式会社島津興業薩摩ガラス工芸）	インテリア科2・3学年
1月		
9日	協働制作：初午祭ポスター納品 （霧島市役所，初午祭実行委員会）	インテリア科3学年
17日	協働制作：駅スタンプリニューアルデザイン （九州旅客鉄道株式会社）	希望者
27～ 30日	インターンシップ	全学科2学年
2月		
5日	企業見学（鹿児島七ツ島ソーラー科学館， ENEOS 喜入基地株式会社）	情報技術科2学年
10日	企業内実習（株式会社藤田ワークス）	電子機械科2学年
13日	報告会及び第2回コンソーシアム代表者会議	担当教員
25日	企業内実習（株式会社藤田ワークス）	電子機械科2学年

4 事業の内容

前年度までの取組を基盤とし、今年度は特に「地域と連携したアウトプット活動の充実」、「3学科連携による学科横断的な実践の充実」、「アントレプレナーシップ教育の推進」の3点を重点に据えて事業を展開した。生徒が地域社会と関わりながら学びを「形」として表現し、専門性を生かした協働的な学習や地域・市場を意識した実践をとおして、主体性と課題解決力の育成を図った。

(1) 地域と連携したアウトプット活動の充実

地域と連携したデザイン制作活動に取り組み、学習成果を地域へ還元するアウトプット型の実践を行った。

初午祭のポスター制作では、市役所及び実行委員会とインテリア科生徒がデザインイメージに関するヒアリングを行い、生徒は複数班に分かれてデザイン案を制作した（図3）。中間報告における指摘を踏まえて修正を重ね、最終的に選定された1点を完成させた（図4）。



図3 ヒアリング



図4 中間報告

霧島市文化協会溝辺支部創立50周年を記念した看板デザイン制作では、関係協会との打ち合わせを実施し（図5）、創作文字担当者とのイメージ共有を図りながらブラッシュアップを行い、完成に至った（図6）。



図5 制作作業



図6 除幕式

また、前年度から継続して取り組んできた黒酢のラベルデザインが最終段階を迎え、デザインが決定した。併せて化粧箱のパッケージデザインについても検討・制作を進め、完成させた（図7）。

さらに、JR九州から駅スタンプデザインのリニューアルに関する依頼を受け、全校生徒を対象にデザインを募集した。初午祭及び隼人塚を題材とした2作品を提出した結果、初午祭をモチーフとしたデザインが採用され、

地域に根ざしたデザインとして活用されることとなった（図8）。



図7 打合せ



図8 駅スタンプ設置

(2) 3学科連携による学科横断的な実践の充実

インテリア科・電子機械科・情報技術科の3学科が連携し、地域の特産品を表現するイルミネーション製作に取り組んだ。前年度に美術部を中心として実施していた活動を、より実践的かつ発展的な内容へと深化させた。

今年度、デザインはインテリア科、架台製作を電子機械科、LED施工を情報技術科が担い、学科横断的な活動によって、各学科の専門性を生かした協働的なものづくりを実現した。これにより、生徒は専門分野の知識や技術を相互に補完しながら、工程全体を見通した計画的な製作に取り組む力を養った。完成品は、LUMI Satsuma2025（鹿児島市）に出展している（図9～12）。製作から設置、点灯に至る一連の工程を関連事業者と協働して実施することで、実社会と結び付いた学びとなり、地域との連携を一層強化する取組となった。



図9 デザイン（インテリア科）



図10 架台製作（電子機械科）



図11 LED施工（情報技術科）



図12 LUMI Satsuma2025 出展

(3)アントレプレナーシップ教育の推進

単なる「ものづくり」にとどまらず、地域ニーズや市場を意識した実践へと発展させることを目的に、アントレプレナーシップ教育を推進した。

地元でECサイトを展開する株式会社オーガランドから講師を招聘し、3学年全員がマーケティングを基軸とした商品開発やビジネスモデルの構築、商品化後の評価・改善に至るPDCAサイクルについて、具体的事例を交えて講話をいただいた(図13)。

また、情報技術科2学年では、ソフトマックス株式会社による医療系情報システムの出前授業を実施し、システムの構築や運用の考え方について学ぶ機会を設けた(図14)。

これらの学習をとおして、生徒はものづくりに必要な市場調査や利用者意識の分析に基づき課題を発見・解決する力を高め、地域社会における自らの活動の意義を主体的に捉えつつある。

さらに、工業高校である本校が霧島市立国分中央高等学校と学校間における教科横断的な連携学習として、商業系学科との合同グループワークを実施した。商業科の取組紹介をとおして、商品開発や販売実習、マーケティング活動に関する具体的手法を学んだ上で、「本校の実習作品を“商品”にするためには」をテーマにグループディスカッションを行った。工業系・商業系の生徒が混成チームとなり、技術的視点と経済的視点を結び付けた探究的な学びを実践した(図15)。



図13 出前授業①



図14 出前授業②



図15 連携学習

(4)産学官連携による専門分野の実践的学習

各学科において、専門分野の理解の深化と実践力向上を目的とした取組を実施した。

インテリア科では、公益財団法人鹿児島県建築士会より建築設計競技に向けて講師を派遣していただき、実務を意識したプランニングに関する講習・演習を実施した。また、第一工科大学から講師を招聘し、BIMに関する出前授業を実施した。初回は基礎的な概念や事例、最新トレンドについて学び、2回目は大学の施設を活用した発展的なBIM体験学習を行うなど、実践的理解を深める機会となった(図16)。また、美術展及び薩摩切子工場の見学をとおして、創造性や伝統工芸における技術・デザインへの理解を深めた。

電子機械科では、マイクロカット株式会社の講師による講話や企業内実習を実施し、精密加工技術や産業界の現状、産業人としての仕事観について学んだ。実際の工場設備や最新の工作機械・測定装置を用いた実習をとおして、実践的な技能の向上を図った（図 17）。



図 16 BIM 体験学習



図 17 企業内実習

情報技術科では、地元の半導体関連企業及び半導体装置企業の見学を実施し、最先端技術や製造現場を直接体験することで、ものづくり産業への理解を深めた。

(5) 情報活用能力及び情報モラルの育成

情報分野においては、第一工科大学から講師を招き、AI 活用に伴う情報モラルについて全校生徒を対象とした講話を実施した（図 18）。さらに、2 学年を対象に、各クラスで生成 AI（NotebookLM など）を活用した文書作成、画像生成、音楽制作等の実践的な講義を行い実践するなど、適切な利活用について理解を深めた（図 19）。



図 18 情報モラル講話



図 19 生成 AI の出前授業

(6) 教職員の専門性向上を目的とした企業連携研修（TIG 溶接）

教職員の専門的指導力の向上を目的として、地元企業と連携した TIG 溶接に関する研修を実施した。昨年度は本校設備を使用して実施したが、今年度は校内設備が改修工事のため、企業へ出向いて研修を行った。

研修では、現場で使用されている設備を活用し、実務に即した TIG 溶接の技術や留意点について、企業の技術者から直接指導を受けた。本校を卒業して 3 年目となる社員も講師として対応していただき、学校での学習内容と実際の現場における技術・技能のつながりについても具体的な助言を得ることができた（図 20）。



図 20 職員企業研修

5 事業の成果とその評価

(1) 課題解決の状況

ア アウトプット活動をとおした実践力・表現力の向上

地域と連携したポスター，看板，ラベル，駅スタンプ等の制作活動をとおして，生徒は「依頼を受け，要望を把握し，修正を重ねて完成させる」という実社会に即した制作プロセスを経験した。

ヒアリングや中間報告を踏まえた改善を繰り返すことで，単なる作品制作にとどまらず，相手の意図を汲み取る力や表現力，責任をもって成果物を仕上げる姿勢が育成された。完成した成果物が実際に地域で活用されていることは，生徒の達成感や自己肯定感の向上にもつながった。

イ 学科横断的な協働による専門性の深化と視野の拡大

3学科が連携したイルミネーション製作では，デザイン，架台製作，LED施工といった異なる専門分野を結び付けた協働的なものづくりを実現した。

生徒は自らの専門分野の役割を理解するとともに，他学科の知識や技能の重要性を認識し，工程全体を見通しながら課題解決に取り組む力を身に付けた。これにより，単一学科では得られない横断的視点やコミュニケーション力が育成された。

ウ アントレプレナーシップの涵養と課題解決力の育成

企業の方による講話や合同グループワークをとおして，生徒は製品を「作る」視点だけでなく，「売る」「活用される」視点へと意識を広げた。マーケティング，ビジネスモデル，PDCA サイクルといった考え方に触れることで，市場や利用者を意識して課題を発見し，改善策を考える姿勢が育成された。特に，商業系学科との連携学習では，技術と経済を結び付けた思考の重要性を理解するなど，実践的なアントレプレナーシップ教育の視点を生徒が意識するきっかけとなった。

エ 専門分野における実践的理解と学習意欲の向上

各学科における企業講話，大学講師による出前授業や企業内実習・施設見学をとおして，生徒は専門分野の学びが実社会でどのように活用されているかを具体的に理解することができた。

また，最新技術や実務に触れることで，学習内容への関心や意欲が高

まり、将来を見据えた主体的な学習態度の形成につながった。

オ 情報活用能力及び情報モラル意識の向上

AI 活用に関する講話や実践的な授業をとおして、生徒は生成 AI の利便性とリスクを正しく理解し、適切に活用しようとする意識を高めた。

情報技術を「使う力」だけでなく、「考えて使う力」を育成することができ、今後の学習や社会生活においても重要な基盤となる成果が得られた。

カ 教職員の専門性向上・指導力の充実

企業と連携した TIG 溶接に関する研修をとおして、教職員が学校での指導内容を現場の実態に即して見直す視点を獲得する機会となった。また、学校での学習と現場で求められる技術・技能とのつながりについて具体的な助言を受けることで、教育内容と産業界との接続の在り方を再確認する機会となった。

教職員の専門性の向上のみならず、実社会を意識した教育実践の質を高める取組として有意義であり、今後の授業・実習指導の充実につながる成果が得られた。

本事業をとおして、企業や関係機関との打合せや現場での作業に取り組む中で、生徒は社会人として求められる基本的な態度や責任感、スケジュール管理の重要性等を実践的に学ぶ機会を得た。これらの経験は、将来の進路選択や職業観の形成にも良い影響を与えていると考えられる。

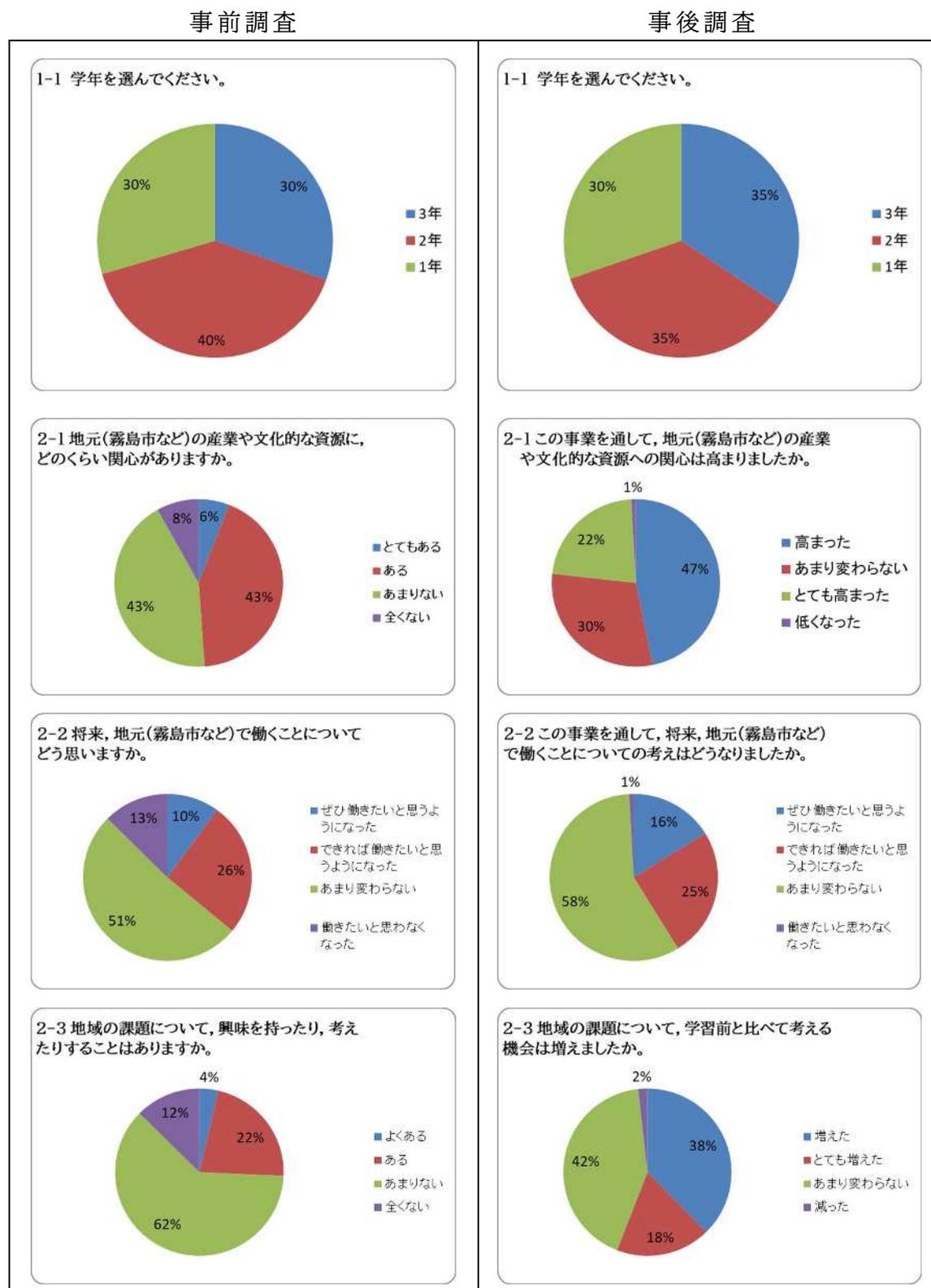
本事業は、長期的な視点で継続していくことに意義がある取組であり、最終的な成果は、将来的に地域を支える人材の増加として表れるものである。そのため、短期間で数値的な成果を示すことは難しいものの、学校と地域が連携した人材育成の基盤づくりという点では、着実な前進が見られている。

また、本事業に取り組むことにより、多くの地元企業や地域の方々との新たな接点生まれ、生徒の学びのために前向きに関わっていただく中で、学校と地域との距離が縮まり、地域融合型人材育成を身近に感じられるようになったことは大きな成果である。

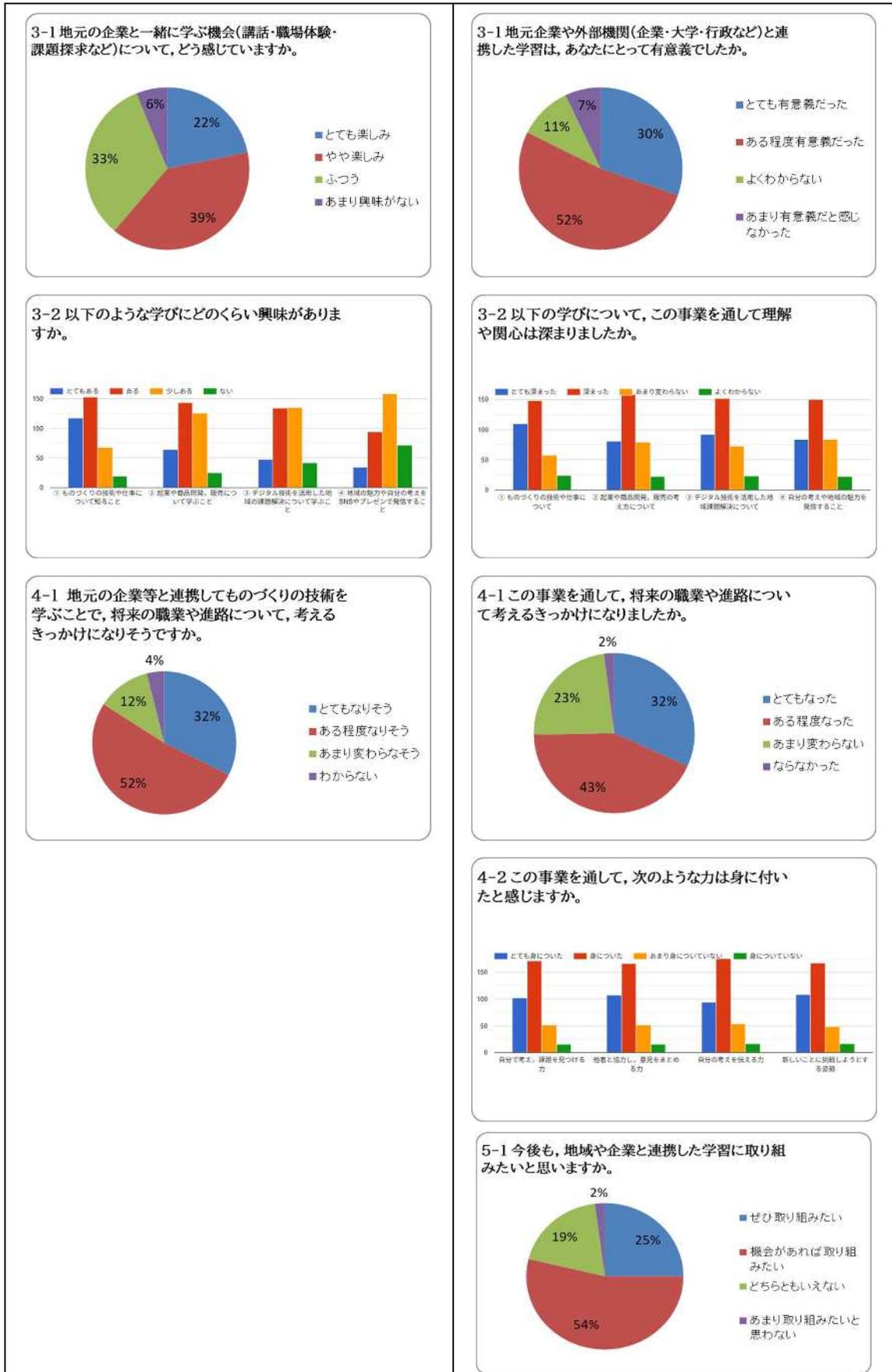
(2) 評価

本事業では、全校生徒を対象に事前調査及び事後調査を実施し、生徒の意識や学びの変化について検証を行った（グラフ1）。

グラフ1 事前調査と事後調査①



グラフ1 事前調査と事後調査②



ア 地域理解・郷土への関心

事前調査において、「地元の産業や文化に関心がある」と回答した生徒は約5割にとどまっていた。これに対し、事後調査では「関心が高まった」「やや高まった」と回答した生徒が約7割を占め、地域に対する関心の向上が確認された。また、「地域の課題について考える機会が増えた」とする回答も過半数に達しており、学習活動をとおして地域を身近な存在として捉える意識が一定程度醸成されたといえる。

イ 進路意識・職業観への影響

将来の進路や働き方について、「地元で働くことに関心がある」と回答した生徒は、事前調査では約3割であったが、事後調査では約4割に増加した。特に、地元企業や産業に触れる活動を経験した生徒ほど、進路選択の視野が広がったと回答する傾向が見られ、地域連携学習が進路意識の形成に一定の影響を与えたことがうかがえる。

ウ 連携学習の教育的効果

企業・大学・行政等と連携した学習について、事後調査では「非常に有意義だった」「有意義だった」と回答した生徒が8割以上を占めた。自由記述においても、企業見学、実習、商品開発やデザイン制作、デジタル技術に関する講話など、具体的な活動内容が多く挙げられており、実社会と結び付いた学びが生徒の印象に強く残っていることが確認できる。

エ 資質・能力（アントレプレナーシップ等）の育成

事後調査では、「課題を自ら見つけ考える力」「他者と協働する力」「自分の考えを伝える力」「新しいことに挑戦しようとする姿勢」について、「身に付いた」「やや身に付いた」と回答した生徒が6～7割程度に達した。これらの結果から、実践的な活動をとおして、課題解決力や主体性を中心とした資質・能力が一定程度育成されたことが数値的にも確認できる。

オ 課題と今後の改善点

「参加機会が限られている」「学年・学科による差がある」「活動時間が十分でない」といった課題を挙げる生徒も一定数存在した。今後は、より多くの生徒が継続的に参画できる仕組みづくりや、年間計画の明確化、連携内容の体系化を図る必要がある。

以上のことから、本事業は、アンケート結果において多くの項目で事後調査の数値が上昇しており、生徒の地域理解、進路意識、主体的に学ぶ姿勢及び課題解決力の育成において、一定の成果を上げた取組であったと評価できる。

6 今後の課題

(1) 日程調整及び運営負担の軽減

本事業では、学校行事や企業・関係機関側の業務予定との調整に多くの時間を要する場面が見られた。特に、学校側としては対象生徒をまとめて実施したい一方で、受入側では大人数の受入が難しいケースが多く、複雑な日程編成を余儀なくされる状況が生じている。今後は、年間計画の早期共有や実施形態の柔軟化により、運営負担の軽減を図る必要がある。

(2) 対象学年の偏りと活動時期の課題

現在は主に2・3学年を活動の主体としているが、進路指導や修学旅行等の行事と重なることで、日程的に厳しい状況が生じている。今後は、事業内容に応じて1学年を含めた対象学年の分散を検討し、学年段階に応じた参画体制を構築することが課題である。

(3) 事業規模の継続性と財政面の課題

本事業をとおして、地域連携による実践的な学びや学科横断的な協働の成果が数多く生まれた一方、令和6・7年度と同規模の取組を継続するためには、外部支援や事業費助成への依存が避けられないという課題が明らかとなった。特に、学校外での活動や大型作品の製作・設置については、予算面・安全面・運搬面から、事業終了後に同規模で実施することは現実的に難しいと想定される。

(4) 持続可能な「自校完結型」地域連携への転換

本事業をとおして培われた「地域と連携したものづくり」や「課題解決型の学び」の考え方は、校内の教育活動に着実に根づきつつある。今後は、外部資金に過度に依存せず、校内完結型の取組を中心とした持続可能な地域連携の仕組みを構築することが求められる。具体的には、地域からの依頼や地域行事に対して、「コンソーシアムパーク隼人」での連携や課題研究や実習の時間を活用し、生徒が成果物を提供する形での取組が考えられる。

(5) 地域資源を生かした実施方法の工夫

イルミネーション製作等については、鹿児島神宮や隼人駅など、学校から徒歩圏内の地域施設を中心とした展示とすることで、運搬や設置を含めて自校のリソース内での実施が可能であると見込まれる。このように、地域資源を生かしながら、規模を調整した取組を継続していくことが現実的な方向性である。

(6) 産学官連携を生かした教職員の新技术研修の充実

県立高校においては、施設・設備の老朽化や更新予算の制約により、最先端の機器や最新技術に日常的に触れることが課題となっている。そのため、生徒に対して実社会や産業界の動向を踏まえた指導を行う上で、教職員自身が最新技術や実務的知見を継続的に学ぶ機会を確保することが求められている。

今後は、本事業で構築された産学官連携のネットワークを活用し、大学・行政機関・企業が有する先端技術や研究成果、実務事例に教職員が直接触れる研修の充実を図る必要がある。これにより、教職員の専門性向上

や指導力の高度化を促進するとともに、生徒の学びをより実践的かつ時代に即したものと発展させることが期待される。

(7) 連携体制の維持・発展

今年度は、校務分掌として「コンソーシアム係」を新設し、定期的な係会を実施することで、事業を計画的にかつ3つの学科で協働的に推進してきた。今後は、この体制を生かしつつ、高大連携協定の活用による外部講師の招聘や、報償費・旅費を伴わない形での専門的助言の導入など、地域人材との協働の在り方を工夫していく必要がある。

以上の課題を踏まえ、令和8年度以降は、各種事業への参画ができず資金確保が厳しい場合は、「自校完結型による地域連携の継続」、「本校教育活動への恒常的な組込み」、「持続可能な協働体制の確立」を目指し、地域に根ざした教育活動を段階的に自走化していくことが求められる。その一方で、取組内容や範囲の充実には一定の資金確保が不可欠であることから、各種事業による支援を得つつ、持続可能な形へと移行していくことが今後の重要な課題である。これらの方向性を今のうちに産学官で連携しながら取り組んでいく必要がある。

7 おわりに

本事業の実施に当たり、貴重な機会を御提供いただきました県教育委員会をはじめ、「コンソーシアムパーク隼人」に所属する関係機関、各企業・団体の皆さまに心より感謝申し上げます。多大なる御支援と御協力により、生徒にとって実践的で意義ある学びを実現することができました。今後も本事業で得られた成果と連携を生かし、地域に根ざした教育活動の充実に努めてまいります。

8 協働先一覧

No	協働先	所在地	主な内容
(1)	株式会社藤田ワークス	霧島市	実習指導・職員研修
(2)	マイクロカット株式会社	霧島市	実習指導・出前授業
(3)	ヤマグチ株式会社	霧島市	事業支援
(4)	ソニーセミコンダクタマニュファクチャリング株式会社	霧島市	企業見学
(5)	株式会社アルバック	霧島市	企業見学
(6)	株式会社オーガランド	霧島市	出前授業
(7)	SDGs products 株式会社	鹿児島市	出前授業・協働製作
(8)	ソフトマックス株式会社	鹿児島市	出前授業
(9)	有限会社重久盛一酢醸造場	霧島市	協働制作
(10)	第一工科大学	霧島市	高大連携
(11)	K C S 鹿児島情報専門学校	鹿児島市	高専連携
(12)	霧島市立国分中央高等学校	霧島市	連携学習
(13)	霧島市立霧島中学校	霧島市	体験授業
(14)	霧島市立隼人中学校	霧島市	事業支援
(15)	霧島市立日当山中学校	霧島市	事業支援
(16)	霧島市立牧園中学校	霧島市	事業支援
(17)	初午祭実行委員会	霧島市	協働制作
(18)	霧島市文化協会溝辺支部	霧島市	協働制作
(19)	霧島市役所商工観光部	霧島市	協働制作
(20)	鹿児島モノづくり推進協議会事務局	鹿児島市	事業支援

9 その他（新聞記事等）



南日本新聞 令和 7年 5月 23日



南日本新聞 令和 7年 6月 14日



南日本新聞 令和 7年 10月 14日



南日本新聞 令和 7年 12月 23日



南日本新聞 令和 8年 1月 22日



南日本新聞 令和 8年 1月 22日